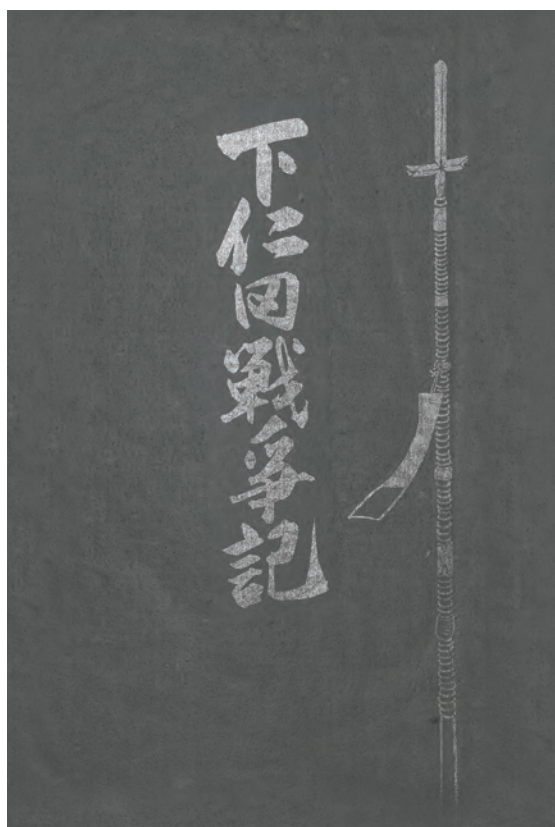


下仁田戦争記

五拾年紀念増補再版

復刊版



群馬地域文化振興会

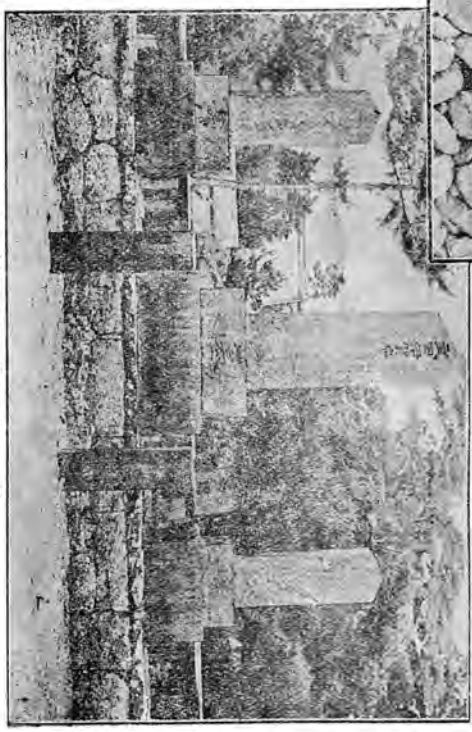
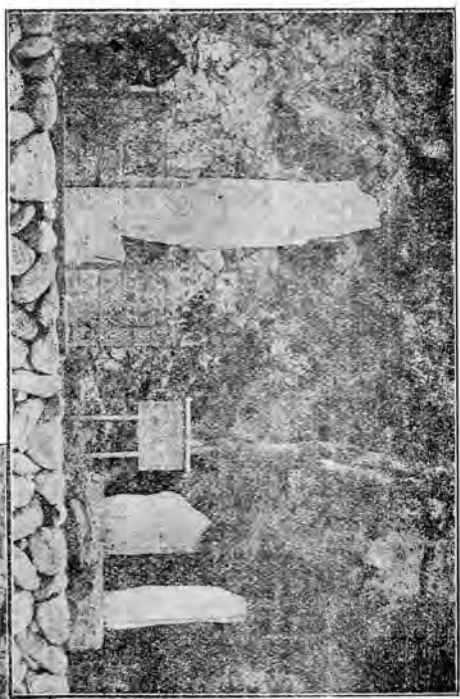


下仁田戦争記

五拾年紀念増補再版

深井景貞編纂

敦賀町松原公園ノ東南隅ニ一小祠アリ松原神社ト號ス舊水戸藩士武田耕雲齋以下ノ靈ヲ祠ル本社ハ明治八年五月神社號ヲ下賜セラレ次テ十一年十月陸下北陸御巡幸ノ時祭祀料金五百金ヲ賜フ其後舊水戸藩士徳川侯爵祠殿ヲ建ツ社殿ノ後ニ墳塋アリ是レ武田等以下ノ屍ヲ埋メタル地ナリ



坂小郡築甘北國野上

ルケ於ニ下岩字

圖碑之者死戰藩崎高

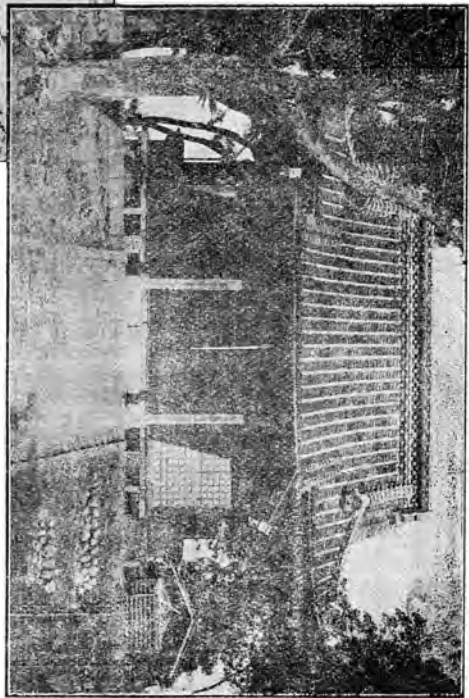
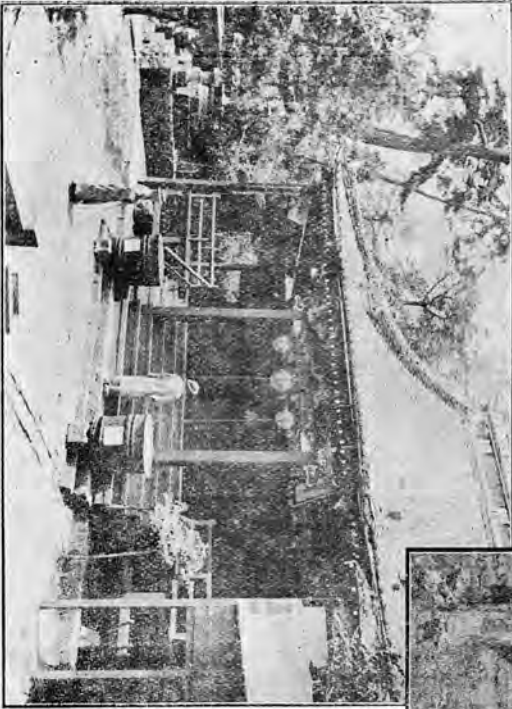
(照參章五第)

塋墳下以田武

村岡片郡馬群

圖之寺水清

(照參上全)



圖之社神政賴

(照參章五第)



編者武裝之圖

(明治五年攝影)

緒言

敗軍の將は兵を談らずと聞く況んや余輩走卒に於てをや將又何をか云はん只此役父は第三番手に將として出陣し兄は第一番手に屬せしも不幸敵彈に中て自刃し余も亦君命を奉じて軍に従ひしもの戦后數年を経て兒孫をして過去を知らしめん爲に家嚴の談と自己の記憶とを記し當時第二番手の將淺井隼馬氏の校閲を經更に各藩の届書其他の文書を參考として一篇となし永く筐底に藏せしも偶知友諸氏並に清水寺住職の知る所となり之が上梓を勧めらるゝや切なり即有志諸氏の賛助を得て此冊子成れり余や當時年齒纔に十六加ふるに淺學菲才杜撰遺漏なきを保し難し讀者諸氏幸に是を諒せよ焉

當時

第二番手大砲方

深井直次郎

景貞
書

下仁田戰爭記

第一章

嘉永六年六月亞米利加合衆國の使節、相州浦賀に來航し通商貿易を請ふ、爾來國家多難物議内訌屢を起る、越へて元治元年五月、藤田小四郎、田丸稻之右衛門等(水戸德川慶篤の臣)攘夷を主とし兵を起して常野の間に據る、初め天保年間、水戸藩主徳川中納言齋照、賢を擧げ奸を斥け大に藩政を革む、藩老結城寅次之を便とせずして事を構へて幕府に訴ふ、幕府乃ち中納言を幽し其の親臣を罰す、以來其の藩分れて二派となる、即ち中納言の親臣藤田誠之進等の黨を正黨(天狗組)とし、結城等の黨を奸黨(書生組)となす、其の後奸黨市川三左衛門、朝比奈彌太郎等勢に因て大に威を藩内に振ふ、誠之進の第二子藤田小四郎田丸稻之右衛門、田中愿藏等大に憤激し中納言の遺志を繼かんと欲し、尊攘の説を唱へて市川等を壓す、此に至り其黨八十餘人筑波山に聚り、贈大納言烈公の木像を白木の神輿に奉し、二荒山に詣り、東照宮の廟を拜せんとし、烏帽子白衣を裝ひ、異形の形列を整へ、元治元年甲子年三月、筑波山を發し、野州宇都宮に宿し、又進て今市宿に至り、祖廟警衛の

幕吏に乞ひ、二十人毎に拜廟するを許さる、拜終りて歸路合戰場宿に至る、偶々例幣使二荒山に赴くに遭ふ、幕吏使をして藤田等に命し之を避けしむ、此に於て藤田等退きて野州太平山に屯す、其間水戸より二十人或は三十人日を追ふて蟻集し殆んど六百を算す、就中藤田芳之助、田中愿藏、猿田忠雄等（猿田忠雄外従者三名は幕府の命により高崎藩に於て捕へ元治二年二月四日斬首）は近傍の民家に令し攘夷の軍資を募る、市民其督促に堪へず之を訴ふ、幕府乃ち近傍の諸藩に令し之を討たしむ、是に因て市川等の黨益々跋扈し正黨を窘む、藤田等は江戸に赴き事を其主に訴へんとし、野州小金井に至る、幕府其の徒の江戸に入るを許さず、騷擾日を次きて甚し。

同年八月、水戸の老臣武田伊賀守正生（耕雲齋）其主に請ひ、支藩なる宍戸藩主（常陸國茨城郡）松平大炊頭を奉し水戸に赴き正奸二黨の乱を鎮めんとす、市川等之を拒て入れず且つ大炊頭を誘ひ遂に水戸松平万太郎宅に於て自刃せしむ、（大目附黒川備中守御目附羽田十五衛門爲檢使相越）是に於て武田正生は藤田等と共に市川等を倒して、尊攘の意志を貫徹せんと欲し大平山に據る、市川等幕府に請ふて之を撃たんとす、幕府若年寄田沼玄蕃頭意尊（遠州相良城主）を鎮撫總督とし近藩に命し之を追討せしむ、時に我藩主江戸に在り

、内海台塲御預りの役を免せられ、賊徒追討の命を蒙る、即ち老臣田中助之進正精、長坂又左衛門忠恕等、兵數百に將として往て軍に従ふ、武田等敗走して那珂川港に逃る、我藩更に命を奉し、老臣津田惠左衛門次幹をして兵三百に將として之に赴かしむ、砲戰四十有餘日、十月に至り敵は糧食將に盡きんとし、且偶内應を爲すものあり即二十三日大擧して之を討つ、我藩先鋒となり那珂川港を渡り、其の本營反射爐を衝て之を破り、數百人を降服せしめ、銃砲彈藥等を分獲す、武田等敗走し將に京都に至り其の旨意を一橋公（徳川慶喜）に訴へ正邪の裁制を仰がんと欲し、見兵九百餘を以て西上の途につき、上州太田に屯し、更に世良田に至り、十一月十二日夜農家を毀ち筏となし、利根川を下り中仙道に出てんとす、幕府更に沿道の數藩に令し、之を追討せしむ。

我藩復興る、當時藩主輝照公（松平右京亮）尙江戸に在り、因て城代宮部兵右衛門義種命を奉し出兵の事を江戸に急報し、令を藩内に布く、時に那珂川港の餘藥未だ全く平かず津田次幹等の率ゆる所の兵亦未還らざるを以て、城兵纔かに六七百に過ぎず、分て數隊となし一は以て城を守り他の三隊は武田等を本道に迎撃せんとす、番頭會田孫之進周幸第一番手を率ひ兵百〇九人、全淺井隼馬貞幹第二番手に將たり兵九十二人、全深井八之丞景忠

二番手に將たり兵百三十二人なり、

第一番手は十一月十三日夜先發し、武田等の二荒街道より來るを聞き倉賀野宿を経て直に玉村宿に至り、第二番手は翌十四日拂曉城を出で倉賀野宿に至る、然るに武田等道を本庄宿に轉したるの報に接せるを以て、第一番手は直に新町宿に至り其の河岸に陣し第二番手の砲士は進て岩鼻河原に陣して共に敵を待つ敵兵高崎藩の備あるを知り本庄宿より道を左に取り山道を通走す、是に於て兩手合して倉賀野に宿陣す、已にして敵兵吉井町に在りと聞き即夜之を襲撃せんことを謀る、議合はずして果さず夜半城代宮部義種命するに須らく追撃すべき旨を以てす、依て十五日鷄鳴兩手二百有餘人軍容を整へ旗鼓堂々逐次倉賀野を發し吉井七日市を経て一ノ宮町に至る時漸く黄昏、而して敵は總勢九百二十五人、大將武田伊賀守、副將藤田小四郎、田丸稻之右衛門、軍師山國兵部等、虎勇神勇義勇龍勇等の數隊に分ち砲八門を以て下仁田に宿す、此時小幡七日市兩藩の兵も亦來りて一ノ宮に會す、乃ち戰畧を議し合撃を謀り兩藩をして先鋒たらしめんとす、兩藩詳するに兵少なく武器乏しきを以てす、仍て敵の後尾を襲撃せんとを約し我藩茲に先鋒と爲る。

其夜陰を以て同所を發し本道より直に下仁田の賊徒を屠らんとす、然るに道路左右山にし